

教育心理学年報 第1集

グループよりも低IQグループでの変動が大であるが、年令段階別の分析では、一般傾向は見出せなかった。なお以上の傾向は、全IQと動作性IQとにおいてが顕著であった。

318 同上(Ⅱ)ーベンダー ゲシュタルト・テストー

精神薄弱児にガンマーアミノ酪酸(GABA)を投与し、薬物がこれら児童の視運動機能に及ぼす影響とその影響の残存効果を、ベンダーゲシュタルト・テストを用いて測定した。

本薬群、擬薬群はそれぞれ26名でIQ, CAに関して等質であった。投与前のパスカルの平均得点は、本薬群142.2, 擬薬群137.4, であった。約8ヶ月投薬後の平均得点は、前者では102.3, 後者では124.9であった。投薬前後の変化を検討すると、本薬群は1%水準で有意に好ましい方向への変化を示したが、擬薬群は有意の変化を示さなかった。このほか図形再生の質的变化と、時間的変動を検討した。投与終了後3ヶ月のテストでは、本薬群に若干の得点増加が認められた。

319 同上(Ⅲ)ダウネー意志気質検査

ここでは、ダウネー意志気質検査資料に基づき、投薬効果の分析を試みた。実験群(25名)、統制群(30名)を分析対象として選んだが、平均IQは夫々(60), (62), 年令範囲は(7-2~15-6)(8-0~15-4)で、両群は、性別、類型別に関しても、ほぼ等しい分布を示す。分析は現在進行中であるが、分析手続は、各サブテスト毎に、Test-Retest間の平均値の変動と、個別的な得点変動の両面より行いつつある。実験群に関しては、有意なTest-Retest間の変動を見出したが、統制群の資料が未整理なので今のところは、一般的な結論を導くまでにいたっていない。大会発表時までには、分析を完了する予定である。

320 同上(Ⅳ)総括

本研究のオリエンテーションを述べ、以上の報告、および本研究でおこなった他のテスト、実験、観察等の結果を要約報告し、この研究についての反省と批判、ならびに今後の問題等について考察する。

321 精神薄弱児の能力段階(Ⅲ): 田中麗之助(愛育研究所)

1, 先に報告した同じ主題の論文(精神薄弱児の能力段階Ⅰ, Ⅱ, 第26回応心大会, 第2回教心大会)のまとめとして、社会性、運動能力、生活習慣、作業準備段階、表現活動の5領域114項目につき、精神年令による発達段階別の配列を試みた。

2, 三年間の実施結果にもとづき、精神薄弱児(5才~16才)の能力の発達の特徴を考察した。

322 精神薄弱者の判定と指導(その1): ○佐藤健・伊藤方一(愛知県精神薄弱者更生相談所)・棚橋千賀子(名古屋大学)

昭和35年7月開設した愛知県精神薄弱者更生相談所で1年間に取扱ったケースのうち約400例の心理学的判定、精神医学的判定結果とそのケースの具体的生活状況の対照から、臨床的判定の問題を考察し指導への見通しを考えることが、本研究の意図するところである。

今回の報告は、いわゆる標準検査で測定した知能と具体的生活状況との関係を、病因的な立場から考察したことが中心となる。